令和2年8月9日 August 9, 2020

被爆 75 周年 長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典

The 75th Nagasaki Peace Ceremony

式 次 第		Program
開 式	$1 \ 0 \ : \ 4 \ 5$	Commencement
原爆死没者名奉安	10:46	Laying to rest of the list of victims who died during the past year
式 辞	10:48	Opening Address
献 水	$1 \ 0 \ : \ 5 \ 2$	Water offering
献 花	$1 \ 0 \ : \ 5 \ 4$	Flower offering
黙 と う	$1\ 1\ :\ 0\ 2$	Silent prayer
長崎平和宣言	11:03	Nagasaki Peace Declaration
平和への誓い	$1\ 1\ :\ 1\ 2$	Pledge for Peace
児童合唱	11:19	Children's chorus
来賓挨拶	$1\ 1\ :\ 2\ 4$	Addresses
合唱 千羽鶴	$1 \ 1 \ : \ 4 \ 0$	Chorus "A Thousand Paper Cranes"
閉 式	$1\ 1\ :\ 4\ 5$	Closing words

	н
会場案内図	1 ページ
司会者名	2
献水の採水場所	2
原爆死没者名簿登載者数	2
式 辞	$3 \sim 4$
長崎平和宣言	$5 \sim 8$
平和への誓い	$9 \sim 10$

目

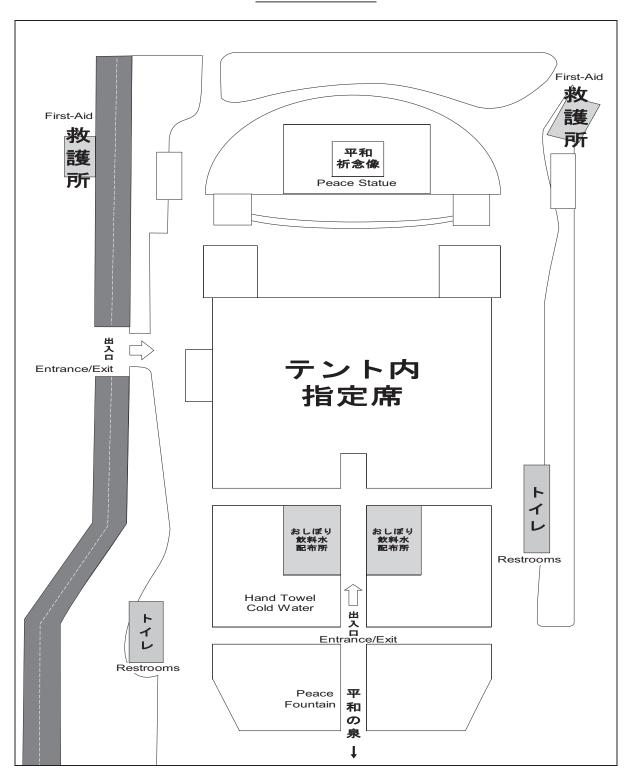
次

児 童 合 唱	11 ページ
千羽鶴(歌)	12
長崎市民平和憲章	$13 \sim 14$
長崎平和宣言<ことばの解説>…	$15\sim 18$
平和祈念式典に向けてメッセージ…	$19\sim 28$
第1回平和祈念式典(ビクター・デルノア)・・・	$29\sim 30$
平和祈念式典会場周辺図	31





会場案内図



会場内には2か所救護所を設置しています。また、熱中症対策として会場後方の【配布所】 にて水やおしぼりを配布しています。ご自由にご利用ください。なお、会場にて体調が優れ ない場合や、体調が優れない方を見かけた方はお近くの係員までお早めにお声かけください。

私立瓊浦高等学校2年 西 山 優 哉

司会者名

私立瓊浦高等学校2年 中 原 愛 音

献水の採水場所

地区	場所	水	種	備考
中央	長崎市松山町 平和公園内	平和	の泉	小・中・高校生 による採水
東	長崎市江平1-32-1 穴弘法奥の院・霊泉寺内	井	水	
西	長崎市西町 19 - 33 西町の湧水	湧	水	
南	長崎市西山1-22-15付近 西山の湧水	湧	水	
北	長崎市三ツ山町139-5 恵の丘長崎原爆ホーム内	井	水	

原爆死没者名簿登載者数(令和2年8月9日現在) 185,982人

式 辞

本日ここに、安倍内閣総理大臣をはじめ、ご来賓各位のご臨席と、被爆者、ご遺族並びに市民の 皆様のご参列のもと、被爆 75 周年長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典を挙行するにあたり、原子爆 弾の犠牲となられました方々の御霊に謹んで哀悼の誠を捧げます。

75 年前の8月9日、長崎に投下された一発の原子爆弾により多くの尊い生命が奪われ、その後 も放射線による障害などによりたくさんの人々の心と体に決して癒えることのない傷跡を残しました。

私たちは、このような非人道的な行為が、二度と繰り返されてはならないとの強い思いから、核 兵器廃絶を訴え続けてまいりました。

しかしながら、米露の中距離核戦力全廃条約が失効するなど、新たな軍拡競争が懸念される中で、 核不拡散条約体制はかつてない危機にあります。そのような中、昨年 11 月、ローマ教皇フランシ スコ台下は、被爆地長崎を訪れ、兵器の使用を制限している国際的な枠組みが、国家間の相互不信 により崩壊する危険があると訴え、核兵器は今日の国際的また国家の安全保障への脅威から私たち を守ってくれるものではなく、信頼関係を構築していくことが重要であると呼びかけられました。

激しい雨が降りしきる爆心地公園において、力強く訴えかける教皇の姿は、直接被爆者の一人で ある私の脳裏に今もしっかりと焼きついています。

教皇の平和へのメッセージが、被爆者の積年の願いとともに全世界へ広がり、一日も早い核兵器 禁止条約の発効、そして核兵器のない世界の実現につながるよう、核不拡散条約発効から 50 年を 迎えた今こそ、私たちは、「長崎を最後の被爆地に」という決意を新たに、世界の人々と共に手を 携えて、最大限の努力を続けていかなければなりません。

本日の式典にあたり、原子爆弾の犠牲となられました多くの御霊のご平安を祈念いたしますとともに、被爆者並びにご遺族の皆様のご健勝を心からお祈り申し上げまして式辞といたします。

2020年(令和2年) 8月9日

長崎市議会議長 佐藤 正洋

Opening Address

Today, at the 75th Nagasaki Peace Ceremony with the attendance of Prime Minister Abe, our esteemed guests, atomic bomb survivors, bereaved families, and citizens of Nagasaki, I would like to begin by expressing my deepest condolences for those lost in the atomic bombing.

On August 9th, 75 years ago, a single atomic bomb stole many precious lives, and even after that, the damage and aftereffects of the radiation left the minds and bodies of many people with wounds that will never heal. We have continued to appeal for the abolition of nuclear weapons with the strong hope that this kind of inhumane action will never be repeated.

The Treaty on the Non-Proliferation of Nuclear Weapons faces unprecedented danger as anxiety abounds concerning a new arms race due to events such as the suspension of the U.S./Russian Intermediate-Range Nuclear Forces Treaty. In such circumstances, Pope Francis visited the atomic bombing site Nagasaki last year in November.

In his speech, His Holiness stated that a climate of mutual distrust among countries risks leading to a dismantling of the international arms control framework. He also declared that we should not look to nuclear weapons to protect us from the current threats facing national and international security; but rather, it is important that we foster mutual trust, instead. The image of Pope Francis, as he spoke at the Hypocenter Park amid the pouring rain, will stay with me forever as a *hibakusha* myself.

I hope that Pope Francis' message of peace together with the long-held wishes of the *hibakusha* spreads globally, the Treaty on the Prohibition of Nuclear Weapons comes into force as soon as possible, and a world without nuclear weapons is realized. Now, as we face fifty years since the enactment of the Treaty on the Non-Proliferation of Nuclear Weapons, we must renew our resolve to make Nagasaki the last place on earth to suffer from nuclear devastation. We must achieve this by endeavoring to the best of our power and joining hand in hand with everyone across the world.

In closing, I pray that those who were lost to the atomic bomb may rest in peace, and I pray for the good health of all the *hibakusha* and bereaved families.

SATO Masahiro Nagasaki City Council Chairman August 9, 2020

長崎平和宣言

私たちのまちに原子爆弾が襲いかかったあの日から、ちょうど75年。4分の3世紀がたった今 も、私たちは「核兵器のある世界」に暮らしています。

どうして私たち人間は、核兵器を未だになくすことができないでいるのでしょうか。人の命を無 残に奪い、人間らしく死ぬことも許さず、放射能による苦しみを一生涯背負わせ続ける、このむご い兵器を捨て去ることができないのでしょうか。

75年前の8月9日、原爆によって妻子を亡くし、その悲しみと平和への思いを音楽を通じて伝え 続けた作曲家・木野普見雄さんは、手記にこう綴っています。

私の胸深く刻みつけられたあの日の原子雲の赤黒い拡がりの下に繰り展げられた惨劇、ベロ ベロに焼けただれた火達磨の形相や、炭素のように黒焦げとなり、丸太のようにゴロゴロと 瓦礫の中に転がっていた数知れぬ屍体、髪はじりじりに焼け、うつろな瞳でさまよう女、そ うした様々な幻影は、毎年めぐりくる八月九日ともなれば生々しく脳裡に蘇ってくる。

被爆者は、この地獄のような体験を、二度とほかの誰にもさせてはならないと、必死で原子雲の 下で何があったのかを伝えてきました。しかし、核兵器の本当の恐ろしさはまだ十分に世界に伝 わってはいません。新型コロナウイルス感染症が自分の周囲で広がり始めるまで、私たちがその怖 さに気づかなかったように、もし核兵器が使われてしまうまで、人類がその脅威に気づかなかった としたら、取り返しのつかないことになってしまいます。

今年は、核不拡散条約(NPT)の発効から50年の節目にあたります。

この条約は、「核保有国をこれ以上増やさないこと」「核軍縮に誠実に努力すること」を約束した、 人類にとってとても大切な取り決めです。しかしここ数年、中距離核戦力(INF)全廃条約を破 棄してしまうなど、核保有国の間に核軍縮のための約束を反故にする動きが強まっています。それ だけでなく、新しい高性能の核兵器や、使いやすい小型核兵器の開発と配備も進められています。 その結果、核兵器が使用される脅威が現実のものとなっているのです。

"残り100秒"。地球滅亡までの時間を示す「終末時計」が今年、これまでで最短の時間を指していることが、こうした危機を象徴しています。

3年前に国連で採択された核兵器禁止条約は「核兵器をなくすべきだ」という人類の意思を明確 にした条約です。核保有国や核の傘の下にいる国々の中には、この条約をつくるのはまだ早すぎる という声があります。そうではありません。核軍縮があまりにも遅すぎるのです。

被爆から75年、国連創設から75年という節目を迎えた今こそ、核兵器廃絶は、人類が自らに課した約束"国連総会決議第一号"であることを、私たちは思い出すべきです。

昨年、長崎を訪問されたローマ教皇は、二つの"鍵"となる言葉を述べられました。一つは「核 兵器から解放された平和な世界を実現するためには、すべての人の参加が必要です」という言葉。 もう一つは「今、拡大しつつある相互不信の流れを壊さなくてはなりません」という言葉です。 世界の皆さんに呼びかけます。

平和のために私たちが参加する方法は無数にあります。

今年、新型コロナウイルスに挑み続ける医療関係者に、多くの人が拍手を送りました。被爆から 75年がたつ今日まで、体と心の痛みに耐えながら、つらい体験を語り、世界の人たちのために警告 を発し続けてきた被爆者に、同じように、心からの敬意と感謝を込めて拍手を送りましょう。

この拍手を送るという、わずか10秒ほどの行為によっても平和の輪は広がります。今日、大テントの中に掲げられている高校生たちの書にも、平和への願いが表現されています。折り鶴を折るという小さな行為で、平和への思いを伝えることもできます。確信を持って、たゆむことなく、「平和の文化」を市民社会に根づかせていきましょう。

若い世代の皆さん。新型コロナウイルス感染症、地球温暖化、核兵器の問題に共通するのは、地 球に住む私たちみんなが"当事者"だということです。あなたが住む未来の地球に核兵器は必要で すか。核兵器のない世界へと続く道を共に切り開き、そして一緒に歩んでいきましょう。

世界各国の指導者に訴えます。

「相互不信」の流れを壊し、対話による「信頼」の構築をめざしてください。今こそ、「分断」で はなく「連帯」に向けた行動を選択してください。来年開かれる予定のNPT再検討会議で、核超 大国である米ロの核兵器削減など、実効性のある核軍縮の道筋を示すことを求めます。

日本政府と国会議員に訴えます。

核兵器の怖さを体験した国として、一日も早く核兵器禁止条約の署名・批准を実現するとともに、 北東アジア非核兵器地帯の構築を検討してください。「戦争をしない」という決意を込めた日本国 憲法の平和の理念を永久に堅持してください。

そして、今なお原爆の後障害に苦しむ被爆者のさらなる援護の充実とともに、未だ被爆者と認め られていない被爆体験者に対する救済を求めます。

東日本大震災から9年が経過しました。長崎は放射能の脅威を体験したまちとして、復興に向け 奮闘されている福島の皆さんを応援します。

新型コロナウイルスのために、心ならずも今日この式典に参列できなかった皆様とともに、原子 爆弾で亡くなられた方々に心から追悼の意を捧げ、長崎は、広島、沖縄、そして戦争で多くの命を 失った体験を持つまちや平和を求めるすべての人々と連帯して、核兵器廃絶と恒久平和の実現に力 を尽くし続けることを、ここに宣言します。

2020年(令和2年) 8月9日

田上富久 長崎市長

Nagasaki Peace Declaration

Exactly 75 years have passed since the day our city was assaulted by a nuclear bomb. Despite the passing of three quarters of a century, we are still living in world where nuclear weapons exist.

Just why is it that we humans are still unable to rid ourselves of nuclear weapons? Are we truly unable to abandon these dreadful weapons that so cruelly take lives without even allowing for dignified deaths and force people to suffer for entire lifetimes as the result of radiation?

Songwriter KINO Fumio lost his wife and children to the atomic bomb on that August ninth 75 years ago and went on to express his sadness and feelings about peace through music. In his memoirs he wrote the following:

The tragedy that unfolded beneath the reddish-black mushroom cloud that spread out on that day is deeply embedded in my heart. The awful sight of hideously burned people covered in flames; innumerable corpses scorched until they were almost carbonized and spread around the debris like logs; women wandering about with leaden eyes; phantasmagoric visions such as this vividly revisit my mind as the day of August ninth comes around each year.

In order to see that no one else ever goes through such a hellish experience, the *hibakusha*, or atomic bombing survivors, have fervently striven to inform us about what went on underneath that mushroom cloud. However, the true horror of nuclear weapons has not yet been adequately conveyed to the world at large. If, as with the novel coronavirus which we did not fear it until it began spread among our immediate surroundings, humanity does not become aware of the threat of nuclear weapons until they are used again, we will find ourselves in an irrevocable predicament.

This year marks the 50th year since the Nuclear Nonproliferation Treaty, or NPT, entered into force. This treaty, which promised that there would be no increase in nuclear-weapon states and that nuclear disarmament negotiations would be pursued in good faith, is extremely an important agreement for humankind. However, in the past few years motions by the nuclear-weapon states to go back on the promise of nuclear disarmament have been increasing, as evidenced by initiatives such as the scrapping of the Intermediate-Range Nuclear Forces Treaty, or INF Treaty. In addition to that, the development and deployment of newer, more sophisticated nuclear weapons and smaller, easier-to-use nuclear weapons, is proceeding. As a result, the threat of nuclear weapons being used is increasingly becoming real.

"Only 100 seconds remain." In order to symbolize this state of crisis, the "Doomsday Clock", an indicator of the time left until the earth's extinction, was set at its shortest time ever this year.

Three years ago, the Treaty on the Prohibition of Nuclear Weapons was adopted by the United Nations. This treaty clearly states that nuclear weapons should be eliminated in accordance with the wishes of humanity. Among the nuclear-weapon states and countries under the nuclear umbrella there have been voices stating that it is too early for such a treaty. That is not so. Rather, nuclear arms reductions are far too late in coming.

It is now 75 years since the atomic bombings and the founding of the United Nations. Having reached this milestone, we should now be remembering that humanity itself promised to eliminate nuclear weapons in Resolution 1 of the United Nations General Assembly.

When the Pope visited Nagasaki last year, he said two things that may be keys. The first was that "To make this ideal (of a world of peace, free from nuclear weapons) a reality calls for involvement on the part of all." The second was that "There is a need to break down the (growing) climate of distrust."

I hereby appeal to everyone around the world.

There are innumerable ways that we can become involved in working for peace.

This year, many people have been applauding the continued efforts by those in the medical profession to battle the novel coronavirus. In the same way, let us now applaud with heartfelt respect and gratitude the *hibakusha* who, while enduring physical and mental pain, have spoken out about their painful experiences for the 75 years since the time of atomic bombing until today in order to provide a warning to people around the world.

With this applause, an act of only 10 seconds or so, we are able to spread the circle of peace. The message of high school students which hangs in this tent today is also an expression of the desire for peace. Small acts such as the folding of paper cranes can convey feelings about peace as well. Let us proceed unceasingly and with conviction to lay down the roots for a culture of peace in civil society.

Young people of the world; the novel coronavirus disease, global warming and the problem of nuclear weapons share one thing in common, and that is that they affect all of us who live on this earth. Are nuclear weapons necessary for the world of the future that you will live in? Let us clear a path to a world free of nuclear weapons and walk down it together.

I appeal to the leaders of countries around the world.

Please aim to break down the growing climate of distrust and instead build trust through dialogue. At this very time, please choose solidarity over division. At the NPT Review Conference which is scheduled for next year, I ask that you show a workable way towards nuclear disarmament which includes reductions in such weapons by the nuclear superpowers of Russia and the U.S.A.

I now appeal to the Government of Japan and members of the Diet.

As a country that has experienced the horrors of nuclear weapons, please sign the Treaty on the Prohibition of Nuclear Weapons and see to its ratification at the earliest possible date. In addition, please examine the plan to establish a nuclear-weapon-free zone in Northeast Asia. And please adhere for eternity to the peaceful principles of the Japanese constitution, which includes the determination not to wage war.

Furthermore, in addition to providing increased support for *hibakusha* who are suffering from atomic bombing aftereffects, I ask that relief measures be extended to those who experienced the atomic bombings but have yet to be officially recognized as bombing survivors.

Nine years have now passed since the Great East Japan Earthquake and Tsunami. As a city that has experienced the threat of radiation, Nagasaki stands in support of the people of Fukushima as they strive towards recovery.

Along with everyone who reluctantly could not attend today's ceremony because of the novel coronavirus, we offer our heartfelt prayers for those who lost their lives to the atomic bomb and hereby declare that Nagasaki will continue to work tirelessly with Hiroshima, Okinawa, and all the people in places where great losses of life were experienced due to war and where peace is longed for, in order to bring about eternal peace and the elimination of nuclear weapons.

TAUE Tomihisa Mayor of Nagasaki August 9, 2020

平和への誓い

原爆が投下された1945年、旧制中学3年生だった私は、神父になるため親元を離れ、大浦天主 ^{5 てんしんがっこう} 堂の隣にあった羅典神学校で生活をしていました。中学校の授業はなく、勤労学生として飽の浦町 の三菱長崎造船所で働く毎日でした。

8月9日、仲間とともに工場で作業をしていた時、突然強い光が見え、大きな音が聞こえました。 近くに爆弾が落ちたと思い、とっさに床に伏せましたが、天井から割れた瓦が落ちてきたので、工 場内にあるトンネルに逃げ込みました。夕方になり、トンネルを出て神学校に帰りました。夜遅く には浦上で働いていた5人の先輩が帰ってきましたが、一日もたたずに全員が亡くなりました。

翌10日の昼には、浦上の実家へ戻ることを許されたので、歩いて帰ることにしました。途中には、 車輪だけとなった電車や白骨が転がっており、川には真っ黒になった人が折り重なっていました。 生きているのか死んでいるのかもわかりません。時々「水・・・、水・・・」という声が聞こえますが、 助けることはできません。浦上天主堂は大きく崩れ、その裏手にあった実家も爆風で壊れていまし た。父は防空壕の中の兵器工場で働いていたので助かりましたが、姉2人と弟と妹は亡くなってい ました。しかし、たくさんの死体を見てきたためか、不思議と涙も出ません。今思えば、普通の精 神状態ではなかったのだと思います。

まちには亡くなった人を焼くにおいが、しばらく立ち込めていました。何のけがもない人が次々 に亡くなっていく現実を目の当たりにすると、次は自分が死んでしまうのではないかという恐怖感 が、なかなか振り払えなかったことを覚えています。このような思いは、もう二度とどこの誰にも してほしくないと思います。

昨年11月、「平和の使者」として、フランシスコ教皇が長崎を訪問されました。最初の訪問地、 爆心地公園に足を運んだ教皇とともに原爆犠牲者に献花した、あの時の場面が蘇ります。そして、 39年前に広島でヨハネ・パウロ二世教皇の「戦争は人間のしわざです」との印象深い言葉を、よ り具体化し、核兵器廃絶に踏み込んだフランシスコ教皇の言葉に、どんなにか勇気づけられたこと でしょう。さらに、「長崎は核攻撃が人道上も環境上も破滅的な結末をもたらすことの証人である 町」とし、まさに私たち長崎の被爆者の使命の大きさを感じる言葉をいただきました。

また、「平和な世界を実現するには、すべての人の参加が必要」との教皇の呼びかけに呼応し、 一人でも多くの皆さんがつながってくれることを願ってやみません。特に若い人たちには、この平 和のバトンをしっかりと受け取り、走り続けていただくことをお願いしたいと思います。



爆心地公園での献花

私は89歳を過ぎました。被爆者には、もう限られた時間しかありま せん。今年、被爆から75年が経過し、被爆者が一人また一人といなく なる中にあって、私は、「核兵器はなくさなければならない」との教皇 のメッセージを糧に、「長崎を最後の被爆地に」との思いを訴え続けて いくことを決意し、「平和への誓い」といたします。

2020年(令和2年) 8月9日

被爆者代表 深堀繁美

Pledge for Peace

In 1945 when the atomic bomb was dropped, I was a third year student at an old-education system junior-high school. I lived at the Latin Seminary next to the Oura Cathedral at the time as I had moved out of my parent's home to become a priest. I did not have any classes, and I worked every day as a student laborer at the Mitsubishi Nagasaki Shipyard in Akunoura-machi.

As I was working with my coworkers at the factory on August 9th, suddenly I saw a bright light and heard a loud noise. I thought a bomb had been dropped near us, so I fell to the floor. But then, broken roof tiles crashed down on us from the ceiling, so we ran into a tunnel inside of the factory. At dusk, we left the tunnel and returned to the seminary. When it was late at night, my five senior schoolmates who worked in Urakami also returned to the seminary, but they all died within less than a day.

At midday the next day, I had been allowed to go back to my home in Urakami, so I decided to return home on foot. Along the way, there were bones and a tram that had been reduced to nothing but wheels. In the river there was a pile of blackened bodies. I didn't know whether they were alive or dead. At times, I could hear the cries of people begging: "Water...Water..." But I could not help them. Urakami Cathedral was mostly destroyed and my home that was behind it had been destroyed by the blast. My father had been working at a weapons factory in an air-raid shelter, so he was fine; however, my two older sisters, younger brother, and younger sister had all died. Strangely, though, I found that I could not weep for them, possibly because I had seen so many dead bodies. When I think about it now, I do not think I was in a normal state of mind at the time.

The smell of the burning bodies of the dead loomed over the city for some time. I had witnessed so many people, who had no scars at all, dying left and right. I remember how I had been gripped by the terror that I would be next. I do not want anyone else to feel as I felt at that time.

In November of last year, Pope Francis came to Nagasaki as a pilgrim of peace. I vividly recall when I conducted a floral tribute to the atomic bomb victims together with His Holiness who had come to the Atomic Bomb Hypocenter Park, the first destination during his visit to Nagasaki. Thirty-nine years ago in Hiroshima, Pope John Paul II delivered a memorable message that "War is the work of man." His Holiness Pope Francis' speech made this message all the more palpable when he addressed the abolition of nuclear weapons. How his words encouraged me. His Holiness stated that Nagasaki is a witness to "the catastrophic humanitarian and environmental consequences of a nuclear attack." These words made me feel the gravity of our duty as *hibakusha*.

I continue to pray in hopes that as many people as possible come together in response to His Holiness' message that in order "to make [peace] a reality calls on the part of all." I hope that the youth will take up the baton of peace and continue the run.

I am now 89 years of age; the time the *hibakusha* have is limited. This year marks 75 years since the atomic bombing and the *hibakusha* are passing away one after another. I resolve to keep appealing in order to make Nagasaki the last place to suffer an atomic bombing while holding in my heart the message of His Holiness that we must abolish nuclear weapons.

FUKAHORI Shigemi Atomic Bomb Survivor Representative August 9, 2020

児童合唱

あの子

永井 隆作詞 木野 普見雄作曲

- 壁に残った
 おさない文字の
 あの子の名
 呼んでひそかに
 取すます
 ああ
 あの子が生きていたならば
- 運動会の スピーカー きこえる部屋に 出してみる テープ切ったる ユニフォーム ああ あの子が生きていたならば
- 3. ついに帰らぬ おもかげと 知ってはいても 夕焼の 門に出てみる 葉鶏頭 ああ あの子が生きていたならば

児童合唱曲「あの子」は、「長崎平和宣言」の中で手記を引用している木野普見雄さんの作曲によるものです。

CHILDREN'S CHORUS

That Child

Lyrics by: Takashi Nagai Music by: Fumio Kino Translated by: Brian Burke-Gaffney

- Remaining on the wall, scribbled in childish letters That child's name I call out and listen secretly, attentively. Oh, if only that child were still alive.
- A loudspeaker blaring at the sports day event Hearing it indoors I run out to see The uniform crossing the goal line. Oh, if only that child were still alive.
- However aware that the child is gone forever I notice, leaving the gate at sunset, The flowers of the hageito in the summer heat. Oh, if only that child were still alive.

The song "That Child", performed by the children's chorus was composed by KINO Fumio, whose memoirs are quoted in the Nagasaki Peace Declaration.

千羽鶴

A Thousand Paper Cranes

- 平和への誓い新たに 緋の色の鶴を折る 清らかな心のままに 白い鶴折りたたみ わきあがる熱き思いを 赤色の鶴に折る
- 平和への祈りは深く 紫の鶴を折る 野の果てに埋もれし人に 黄色い鶴折りたたみ 水底に沈みし人に 青色の鶴を折る
- 平和への願いをこめて 緑なる鶴を折る 地球より重い生命よ 藍の鶴折りたたみ 未来への希望と夢を 桃色の鶴に折る

未来への希望と夢を 虹色の鶴に折る 作詞 横山構山県作曲 大島 ミチル

Lyrics by YOKOYAMA Kanae (translated by B. Burke-Gaffney) Composed by OHSHIMA Michiru

- With a renewed pledge for peace I fold a scarlet crane And with a pure and noble heart I fold a fresh white crane And then I fold a bright red crane, burning with emotion.
- With a fervent prayer for peace

 I fold a purple crane
 And for the people buried in the fields
 I fold a yellow crane
 And then I fold a dark blue crane,
 for the people sunken in the water's depths.
- With an aspiration for peace

 I fold a grass green crane
 And for the lives heavier than the Earth
 I fold an indigo crane
 And then I fold a soft pink crane,
 gazing with hope and dreams to the future.

And still gazing with hope and dreams, I fold a rainbow-colored crane.



「千羽鶴」は、原爆被爆50周年を記念して、歌詞を全国から募集し、曲を長崎市出身の 大島ミチルさんに依頼して作られました。毎月9日の午前11時2分には、市内の防災行政 無線を通じて放送されています。

長崎市民平和憲章

私たちのまち長崎は、古くから海外文化の窓口として発展し、諸外国との交流を通じて豊かな 文化をはぐくんできました。

第二次世界大戦の末期、昭和20年(1945年)8月9日、長崎は原子爆弾によって大きな被害 を受けました。私たちは、過去の戦争を深く反省し、原爆被爆の悲惨さと、今なお続く被爆者の 苦しみを忘れることなく、長崎を最後の被爆地にしなければなりません。

世界の恒久平和は、人類共通の願いです。

私たち長崎市民は、日本国憲法に掲げられた平和希求の精神に基づき、民主主義と平和で安全 な市民生活を守り、世界平和実現のために努力することを誓い、長崎市制施行100周年に当たり、 ここに長崎市民平和憲章を定めます。

- 1. 私たちは、お互いの人権を尊重し、差別のない思いやりにあふれた明るい社会づくりに努め ます。
- 1. 私たちは、次代を担う子供たちに、戦争の恐ろしさを原爆被爆の体験とともに語り伝え、平 和に関する教育の充実に努めます。
- 1. 私たちは、国際文化都市として世界の人々との交流を深めながら、国連並びに世界の各都市 と連帯して人類の繁栄と福祉の向上に努めます。
- 1. 私たちは、核兵器をつくらず、持たず、持ちこませずの非核三原則を守り、国に対してもこ の原則の厳守を求め、世界の平和・軍縮の推進に努めます。
- 1. 私たちは、原爆被爆都市の使命として、核兵器の脅威を世界に訴え、世界の人々と力を合わ せて核兵器の廃絶に努めます。

私たち長崎市民は、この憲章の理念達成のため平和施策を実践することを決意し、これを国の 内外に向けて宣言します。

平成元年3月27日 長崎市議会議決



長崎市章 Emblem of Nagasaki City

NAGASAKI CITIZENS PEACE CHARTER

The city of Nagasaki served for centuries as a gateway for the introduction of foreign culture and knowledge to Japan, and through this history of international exchange it has developed its own unique cultural heritage.

On August 9, 1945, Nagasaki was devastated by the explosion of an atomic bomb. Reflecting upon the actions of our predecessors in past wars, and remembering the unending sufferings of the atomic bomb survivors, we resolve to ensure that Nagasaki is the last place on Earth subjected to the horror and misery of a nuclear holocaust.

Lasting world peace is the common aspiration of all humanity.

In accordance with the spirit of peace cited in the Japanese constitution, we pledge our utmost efforts to promote a life of democracy, peace and safety and to work for the realization of global harmony. We hereby establish, on the 100th anniversary of the inauguration of our modern municipal administration, the "Nagasaki Citizens Peace Charter."

- 1. We will strive to create and maintain a bright social environment characterized by thoughtfulness, respect for human rights, and freedom from discrimination.
- 1. We will strive to enhance peace education and to inform our children on whose shoulders the future lies about the horror of war and the reality of the atomic bombing.
- 1. We will strive to promote the prosperity and welfare of humanity in cooperation with the United Nations and cities around the world while strengthening bonds of friendship as an international culture city.
- 1. We will strive for world peace and disarmament by observing the Three-Fold Non-Nuclear Principles (not to manufacture, store, or introduce nuclear weapons) and by pressing the Japanese government to strictly observe this principle.
- 1. As the mission of an atomic-bombed city, we will strive to rid the Earth of nuclear weapons by revealing the horror of nuclear destruction and by joining in efforts with peace-loving people everywhere.

The citizens of Nagasaki proclaim, to all the people of Japan and other countries, an unbending determination to achieve the ideals expressed in this charter by carrying various peace-promotion measures into concrete practice.

(Resolved by the Nagasaki City Council on March 27, 1989)

長崎平和宣言くことばの解説〉

私たちのまちに原子爆弾が襲いかかったあの日から、ちょうど75年。4分の3世紀がたった今も、私たちは「核 兵器のある世界」に暮らしています。

どうして私たち人間は、核兵器を未だになくすことができないでいるのでしょうか。人の命を無残に奪い、人間 らしく死ぬことも許さず、放射能による苦しみを一生涯背負わせ続ける、このむごい兵器を捨て去ることができな いのでしょうか。

75年前の8月9日、原爆によって妻子を亡くし、その悲しみと平和への思いを音楽を通じて伝え続けた作曲家・ ①木野普見雄さんは、手記にこう綴っています。

私の胸深く刻みつけられたあの日の原子雲の赤黒い拡がりの下に繰り展げられた惨劇、ベロベロに焼けただ れた火達磨の形相や、炭素のように黒焦げとなり、丸太のようにゴロゴロと瓦礫の中に転がっていた数知れ ぬ屍体、髪はじりじりに焼け、うつろな瞳でさまよう女、そうした様々な幻影は、毎年めぐりくる八月九日 ともなれば生々しく脳裡に蘇ってくる。

被爆者は、この地獄のような体験を、二度とほかの誰にもさせてはならないと、必死で原子雲の下で何があった のかを伝えてきました。しかし、核兵器の本当の恐ろしさはまだ十分に世界に伝わってはいません。@新型コロナ ウイルス感染症が自分の周囲で広がり始めるまで、私たちがその怖さに気づかなかったように、もし核兵器が使わ れてしまうまで、人類がその脅威に気づかなかったとしたら、取り返しのつかないことになってしまいます。

今年は、③核不拡散条約(NPT)の発効から50年の節目にあたります。

この条約は、「核保有国をこれ以上増やさないこと」「核軍縮に誠実に努力すること」を約束した、人類にとって とても大切な取り決めです。しかしここ数年、<u>④中距離核戦力(INF)全廃条約</u>を破棄してしまうなど、核保有 国の間に核軍縮のための約束を反故にする動きが強まっています。それだけでなく、新しい高性能の核兵器や、使 いやすい小型核兵器の開発と配備も進められています。その結果、核兵器が使用される脅威が現実のものとなって いるのです。

"残り100秒"。地球滅亡までの時間を示す「©終末時計」が今年、これまでで最短の時間を指していることが、こ うした危機を象徴しています。

3年前に国連で採択された<u>©核兵器禁止条約</u>は「核兵器をなくすべきだ」という人類の意思を明確にした条約で す。核保有国や核の傘の下にいる国々の中には、この条約をつくるのはまだ早すぎるという声があります。そうで はありません。核軍縮があまりにも遅すぎるのです。

被爆から75年、国連創設から75年という節目を迎えた今こそ、核兵器廃絶は、人類が自らに課した約束 "②国連 総会決議第一号"であることを、私たちは思い出すべきです。

昨年、長崎を訪問された®ローマ教皇は、二つの"鍵"となる言葉を述べられました。一つは「核兵器から解放 された平和な世界を実現するためには、すべての人の参加が必要です」という言葉。もう一つは「今、拡大しつつ ある相互不信の流れを壊さなくてはなりません」という言葉です。

世界の皆さんに呼びかけます。

平和のために私たちが参加する方法は無数にあります。 今年、新型コロナウイルスに挑み続ける医療関係者に、多くの人が拍手を送りました。被爆から75年がたつ今日 まで、体と心の痛みに耐えながら、つらい体験を語り、世界の人たちのために警告を発し続けてきた被爆者に、同 じように、心からの敬意と感謝を込めて拍手を送りましょう。

この拍手を送るという、わずか10秒ほどの行為によっても平和の輪は広がります。今日、大テントの中に掲げら れている<u>®高校生たちの書</u>にも、平和への願いが表現されています。折り鶴を折るという小さな行為で、平和への 思いを伝えることもできます。確信を持って、たゆむことなく、「平和の文化」を市民社会に根づかせていきま しょう。

若い世代の皆さん。新型コロナウイルス感染症、地球温暖化、核兵器の問題に共通するのは、地球に住む私たち みんなが"当事者"だということです。あなたが住む未来の地球に核兵器は必要ですか。核兵器のない世界へと続 く道を共に切り開き、そして一緒に歩んでいきましょう。

世界各国の指導者に訴えます。

「相互不信」の流れを壊し、対話による「信頼」の構築をめざしてください。今こそ、「分断」ではなく「連帯」 に向けた行動を選択してください。来年開かれる予定の[®]NPT再検討会議で、核超大国である米ロの核兵器削減 など、実効性のある核軍縮の道筋を示すことを求めます。

日本政府と国会議員に訴えます。

核兵器の怖さを体験した国として、一日も早く核兵器禁止条約の署名・批准を実現するとともに、¹¹北東アジア 非核兵器地帯の構築を検討してください。「戦争をしない」という決意を込めた日本国憲法の平和の理念を永久に 堅持してください。

そして、今なお原爆の後障害に苦しむ被爆者のさらなる援護の充実とともに、未だ被爆者と認められていない被 爆体験者に対する救済を求めます。

東日本大震災から9年が経過しました。長崎は放射能の脅威を体験したまちとして、復興に向け奮闘されている 福島の皆さんを応援します。

新型コロナウイルスのために、心ならずも今日この式典に参列できなかった皆様とともに、原子爆弾で亡くなら れた方々に心から追悼の意を捧げ、長崎は、広島、沖縄、そして戦争で多くの命を失った体験を持つまちや平和を 求めるすべての人々と連帯して、核兵器廃絶と恒久平和の実現に力を尽くし続けることを、ここに宣言します。

2020年(令和2年)8月9日

田上富久 長崎市長

1. 木野普見雄

永井隆博士の詞に曲をつけた「あの子」をは じめとする原爆の歌や市内の小学校の校歌な ど、たくさんの作品を残した作曲家です。

木野さんは、「原爆の曲をつくり、志のある 人に歌ってもらい、少しでも共感を覚えてもら えば平和へのささやかな布石ともなり、原爆で 犠牲になった人々の魂も安らいでもらえること を乞い願う」と、曲に込めた思いを語っていま す。

8月9日の平和祈念式典では、山里小学校で 歌われている「あの子」と、同じく木野普見雄 さんの作曲により城山小学校で歌われている 「子らのみ魂よ」を交互に披露しています。

2. 新型コロナウイルス感染症

「新型コロナウイルス感染症(COVID-19)」 は、2019(令和元)年12月以降、中国の武漢市 を中心に広がり、その後世界に広がりました。 これまでに世界160か国以上に感染が拡大し、 世界全体で感染者は1,600万人以上、死者は64 万人を上回っています(WHO、2020年7月27 日現在)。治療薬やワクチンの開発が急がれて いますが、一人ひとりが感染予防に努める「新 しい生活様式」の実践が求められています。

3. 核不拡散条約(NPT)

核不拡散条約(NPT)は、核保有国が増える (核が拡散する)ことを防ぐ目的でつくられた 条約で、1970(昭和45)年に発効しました。 2003(平成15)年1月に一方的に脱退を表明し ている北朝鮮も含めると、現在の国連加盟国の 中で、インド、パキスタン、イスラエル、南スー ダンの4か国を除く191か国・地域が加入して います。

主な内容は、以下の3つです。

(1) 「核不拡散」

当時、すでに核兵器を保有していたアメリ カ・ロシア(旧ソビエト)・イギリス・フランス・ 中国の5か国だけに核兵器の保有を認め(核兵 器国)、それ以外の国(非核兵器国)が保有す ることを禁止しています。

(2) 「核軍縮」

5つの核兵器国には、保有する核兵器の全廃 に向けて誠実に努力していくことが義務付けら れています。

(3) 「原子力の平和的利用」

非核兵器国には、原子力の平和利用が認めら れており、原子力技術や核物質を使用する場合 は、必ずそれが平和利用であるかどうかを確認 するために、国際原子力機関(IAEA)の査察 を受ける義務があります。

4. 中距離核戦力(INF)全廃条約

射程500キロから5,500キロの地上配備型ミサ イルを禁じるこの条約は、冷戦時代の1987(昭 和62)年にアメリカと旧ソ連との間で結ばれた、 歴史上初めて核兵器の削減・廃棄を実現した条 約です。この条約によって、アメリカと旧ソ連 は対象となる全ての中距離核ミサイルを破棄 し、冷戦終結のきっかけとなりました。しかし、 アメリカとロシアの両国は、お互いに相手が条

ことばの解説

約違反を犯していると主張し、この条約からの 離脱を表明したため、2019(令和元)年8月2 日に失効しました。

5. 終末時計

核戦争などによって地球が滅亡する日を午前 零時に見立てて、それまでの残り時間を示す時 計です。マンハッタン計画に携わった科学者た ちが創刊したアメリカの科学雑誌『原子力科学 者会報』で毎号表紙に掲げています。初めて表 紙に登場した1947(昭和22)年は残り7分でし た。冷戦でアメリカと旧ソ連との対立が激化す る中で針は進み、アメリカの水爆実験を受けて 旧ソ連が新型核実験を実施した1953(昭和28) 年は残り2分となりましたが、冷戦終結後の 1991 (平成3)年には残り17分まで戻りました。 しかし、2020(令和2)年は"残り100秒"と過 去最短を示しています。

6. 核兵器禁止条約

核兵器は一旦使用されれば、取返しのつかな い甚大な被害を人間や環境に与えます。それは 戦争での使用だけでなく、核兵器が存在する限 り、誤って使われたり、テロなどに使われたり する危険性があります。NPT(3で解説)で約 東された核軍縮が進まない状況に不満を持つ 国々の間で、核兵器を法的に禁止しようとする 動きが、2010(平成22)年頃から高まりました。

そのような核兵器を持たない国々の主導のも と、三度にわたる核兵器の非人道性を考える国 際会議の開催、核軍縮に関する国連作業部会の ネ・パウロ2世以来38年ぶりでした。雨が降り

開催、国連での核兵器禁止条約に向けた交渉会 議を経て、2017(平成29)年7月、国連加盟国 の6割を超える122か国が賛成し、核兵器禁止 条約が採択されました。

条約の前文には被爆者の苦しみと被害を深く 心に留めるとあります。被爆者の「私たちの経 験を、もう、誰にもさせたくない」という願い を、国際社会がしっかりと受けとめました。

しかし、採択されただけでは、条約は力を持 ちません。本当に力を持つためには、それぞれ の国の議会等が国内法にしたがって条約を認 め、締結する意志を最終的に決定しなければな りません。これを「批准」といいます。その批 准国が50か国となることで、条約は「発効」し、 初めて力を持ちます。2020(令和2)年7月27 日現在、署名国が82か国、批准国が40か国とい う状況です。

日本を含む核兵器に依存する国々などは、条 約に今も署名しないとしていますが、条約が発 効すれば、それらの国に対する批判や圧力が高 まり、核軍縮を進める力となることが期待され ています。

7. 国連総会決議第一号

1946(昭和21)年、創設されたばかりの国際 連合は、総会決議第一号として、核兵器など大 量破壊兵器の廃絶を最優先目標に定めました。

8. ローマ教皇

ローマ教皇の来崎は、1981(昭和56)年のヨハ

しきる厳粛な雰囲気の中、爆心地公園におい て、世界中の人々の心に響く平和のメッセージ を発信されました。

そして、原爆資料館の芳名録に、「この資料 館を訪れるすべての方々にお願いします。平和 のために祈ってください。決して破壊があって はなりません、決して戦争があってはなりませ ん!」と残されました。

高校生たちの書

県立長崎西高書道部の生徒が、縦3.5メート ル、横7.8メートルの大型キャンバスに平和へ の願いを込めて作り上げた作品です。

「被爆75周年祈念」「長崎から世界へ つなご う命 平和な未来」などと書いた周囲に、「世 界平和」を意味する30か国語の虹色の文字を配 した力強いメッセージです。

10.NPT再検討会議

核不拡散条約(NPT)では、条約が定める義務の履行状況を確認し、締約国の取組みを強化するため、5年毎に再検討会議と、その間に3回から4回の準備委員会が開催されます。

2015(平成27)年の再検討会議において、参 加国の多くが核兵器の非人道性(一発で多くの 人々を無差別に殺傷する核兵器を使用すること は、人間として許されないこと)に言及し、核 兵器禁止に向けた法的枠組みについての議論を 速やかに開始すべきであると訴えました。

2020(令和2)年の再検討会議は2020年4月 ~5月に開催予定でしたが、新型コロナウイル ス感染拡大の影響で延期となっています。

11. 北東アジア非核兵器地帯

地域の国々が条約を結び、核兵器の製造、実 験、取得、保有などをしないと約束した地域の ことを「非核兵器地帯」といいます。条約によっ て核戦争の危機をなくし、国際的な緊張をやわ らげることで、核兵器の役割を減らし、核保有 国が核兵器を開発したり、保有したりする動機 をなくしていくことにもつながります。

地球の南半球は、1967(昭和42)年のラテン・ アメリカ核兵器禁止条約のほか4つの条約(南 極条約、南太平洋非核地帯条約、アフリカ非核 兵器地帯条約、東南アジア非核兵器条約)によ り、既に陸地のほとんどが非核化されています。

北半球でも、1998(平成10)年にモンゴルの 「非核地位」が国連で認められ、2009(平成21) 年には中央アジア(ウズベキスタン、タジキス タン、キルギス、トルクメニスタン、カザフス タン)非核兵器地帯条約が発効されています。

「北東アジア非核兵器地帯」とは、日本と韓 国と北朝鮮の3か国を「非核兵器地帯」にしよ うとするものです。条約が実効力を持つために は、3か国に核兵器が存在せず、近隣の核保有 国(アメリカ、ロシア、中国)が、3か国を核 兵器で攻撃をしないと約束することが必要にな ります。

2018(平成30)年以降に高まった朝鮮半島の 非核化に向けた国際的な動きを千載一遇の好機 として、北東アジア全体の平和のために日本政 府が果たすべき役割は大きいといえます。

(名誉市民) カズオ・イシグロ氏からのメッセージ (Honorary Citizen) Message from Kazuo Ishiguro

被爆75周年長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典に向けて

今日は恐ろしい出来事の記念日です。しかし、あの日長崎の人々を襲った苦しみが75年 間繰り返されなかったという節目の日でもあります。私の母は被爆当時、市内にいた10代 の若者でしたが、その後、長く平穏な人生を送ることができました。そう考えますと、この 記念日は恐怖と悲しみだけでなく、苦難からの克服と希望を想起させる日なのです。私たち の文明社会がいかに脆弱な状態にあるかを忘れてはなりません。そして、現在の困難な時代 にあっても、これまで安全に過ごすことができたのは国際協力と国際理解のおかげであり、 その重要性を忘れてはなりません。私たちは大きな危険にさらされ続けていること、そして 人間の命こそが至上の価値を持つものであることを心に留めましょう。 (この日本語文書は参考のための仮翻訳で、正文は英文です)

> 令和2年8月9日 カズオ・イシグロ

Message for the 75th Nagasaki Peace Ceremony

This is the anniversary of a terrible event. But this milestone also marks seventy five years during which time there has been no repeat of what was inflicted on the people of Nagasaki that day. My mother, then a teenager in the city, was able to go on to enjoy a long peaceful life. So this is an anniversary that brings triumph and hope, as well as horror and sadness. Let us not forget how fragile our civilzation remains. And in our current, troubled times, let us not forget the importance of the international cooperation and understanding that has brought us safely through these years. Let us remember the huge dangers that continue to threaten us, and the supreme value of human life.

Kazuo Ishiguro August 9, 2020

(栄誉市民) さだまさし氏からのメッセージ(Honorary Citizen) Message from SADA Masashi

被爆75周年長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典に向けて

被爆者だった叔母の言葉が胸に残っています。

原子爆弾だけが悪では無く。

本当の悪は人の心の中にいて、次々と兵器を考え出すのです。

そして叔母はこうも言いました。

もしも私たちの国が先にこの爆弾を作っていたら、他のどこかの国の誰かが私と同じ苦しみを受けたかもしれません。

つまり戦争が全て悪いのです。武器で平和を買うことなど絶対に出来ないのです、と。

世界中から、戦争と核兵器が無くなるよう、心から祈ります。

令和2年8月9日 さ だ ま さ し

Message for the 75th Nagasaki Peace Ceremony

The words of my late aunt who was a *hibakusha* still ring in my heart.

She said:

Nuclear weapons are not the only evil.

The true evil is to be found in people's hearts and it makes people think of developing weapons time and time again.

She also said:

If Japan were the first to develop the bomb, someone else in another country may have suffered just as I had.

In the end, war is the ultimate evil. It is impossible to buy peace through weapons.

I wholeheartedly pray that there will be no more war or nuclear weapons on Earth.

(This translation is to be used for reference purposes only. The original message is in Japanese.)



QRコードでメッセージ動画を見ることができます

SADA Masashi August 9, 2020

Use the QR code to view messages

包括的核実験禁止条約機関(CTBTO)準備委員会からのメッセージ Message from the Comprehensive Nuclear-Test-Ban Treaty Organization

被爆75周年長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典に向けて

75年前、広島と長崎は原爆投下による苦痛と荒廃を経験しました。今日に至るまで、日本 で起こったことは人類を悩ませ続け、以下のような挑戦的な問いを投げかけてきました。「こ のような恐ろしい爆撃につながってしまった攻撃的な本能から、私たちは逃れることはでき ますか?」私が長崎を訪れた際、13歳で原爆投下から生き延びた田中熙巳氏に感銘を受けま した。被爆者の方々は、人類を力強く動かす道徳的羅針盤です。彼らの苦痛と経験談は、核 のリスクをより完全な形で目に見えるものにしました。

彼らに耳を傾けることで、私たちは行動できるのです。

75周年祈念の年は、危機的な瞬間にあります。私たちのグローバルな価値観と原則が見直 され、より安定した平和な世界に向けて培ってきたものが脅かされています。包括的核実験 禁止条約は、核兵器のない世界を実現するためにとても有効な手段です。私は日本のような 力強い支持国、そして国際社会が、この条約の発効にコミットし、前向きでい続けるよう促 します。条約は、いつしか必ず発効します。被爆者の方々は私たちに、核軍縮の長い戦いに おいて、忍耐、決心、そして解決が不可欠であることを教えてくれました。私たちは、始め たこの戦いを最後まで終えなければなりません。なぜなら、広島と長崎で起こったことは、 二度と繰り返されてはならないからです。

> 令和2年8月9日 包括的核実験禁止条約機関準備委員会 事務局長 ラッシーナ・ゼルボ

IBI()

Message for the 75th Nagasaki Peace Ceremony

Seventy-five years ago, Hiroshima and Nagasaki experienced the agony and the devastation caused by atomic blasts. To this day, what happened in Japan continues to haunt humanity and raises a challenging question: can we ever escape the destructive instinct that led to these horrific bombings? In one of my visits to Nagasaki, I was inspired by Terumi Tanaka, who survived the bombing as a 13-year old boy. The Hibakusha are a forceful moral compass for humanity. Their pain, and their stories, have made nuclear risks more perceptible and concrete. We must hear them so we can act.

The 75th anniversary comes at a critical moment. Our global values and principles are under scrutiny, and past gains towards a more stable and peaceful world are under threat. The Comprehensive Nuclear-Test-Ban Treaty is truly a powerful tool to achieve a world free of nuclear weapons. I urge strong supporters like Japan and the international community, to remain committed and optimistic – the Treaty will enter into force. The Hibakusha have taught us that patience, determination and resolution are indispensable in the long battle towards nuclear disarmament. We must finish what we started, because what happened in Hiroshima and Nagasaki must never happen again.



QR コードでメッセージ動画を 見ることができます Dr. Lassina Zerbo Executive Secretary Preparatory Commission for the Comprehensive Nuclear-Test-Ban Treaty Organization August 9, 2020

Use the QR code to view messages

赤十字国際委員会(ICRC)からのメッセージ Message from the International Committee of the Red Cross

被爆75周年長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典に向けて

ICRC

私たち赤十字国際委員会は、1945年の痛ましい記憶の継承に取り組んでこられた長崎市と 長崎市民の皆さまに心から敬意を表します。長崎市は過去75年にわたって原爆投下の傷を 負いながら、被ばく者の証言を世界に向けて発信してきました。言いようのない苦しみや不 条理な死、計り知れない勇気が込められた証言は、私たちに核兵器の真の姿を再認識させて くれます。それは、他に類をみない壊滅的な人道上の結果をもたらし、人類の存続を脅かす 恐ろしい戦争兵器としての姿です。さらに言うと、私たちは、核兵器が再び使われた場合に 起こるであろう人道上の惨禍に対応する準備ができていません。準備ができないのであれば、 未然に防ぐしかありません。今こそ長崎で原爆の犠牲となった多くの人々に哀悼の意を捧げ、 核兵器の禁止・廃絶に早急に取り組む必要があります。長崎を、核兵器に破壊された最後の 地にするべく。

> 令和2年8月9日 赤十字国際委員会 (ICRC) 駐日代表 レジス・サビオ

Message for the 75th Nagasaki Peace Ceremony

The International Committee of the Red Cross (ICRC) extends its heartfelt appreciation to Nagasaki and its people for their long-standing efforts to preserve and uphold the painful memories of 1945. The City of Nagasaki has borne the scars of this bombing for the last 75 years and has made the testimonies of the *hibakusha* known to the world. These testimonies – of unspeakable suffering, senseless loss, and unfathomable courage – make us all realize what nuclear weapons really are: uniquely horrific and terrifying weapons of war that will unleash catastrophic humanitarian consequences and threaten the very survival of humanity. What is more, we are not prepared to deal with the humanitarian catastrophe that would occur if nuclear weapons were to be used again. What we cannot prepare for, we must prevent. It is high time that we honour the memory of the hundreds of thousands of victims of the atomic bombing of Nagasaki and take urgent action to prohibit and eliminate nuclear weapons. Let Nagasaki be the last place to suffer from nuclear devastation!



QR コードでメッセージ動画を 見ることができます

Use the QR code to view messages

Régis Savioz Head of Delegation in Japan International Committee of the Red Cross (ICRC) August 9, 2020

(姉妹都市) ブラジル サントス市長からのメッセージ (Sister City) Message from the Mayor of Santos, Brazil

被爆75周年長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典に向けて

被爆75周年長崎平和祈念式典に際し、姉妹都市長崎市に心からのご挨拶をお送りいたし ます。核軍縮と世界平和のための戦いを強力に後押しするため、ブラジルを離れ日本に向か いたいところですが、私たちは世界的に脅威となっている感染症の拡大に脅かされていま す。

今こそ、人間の命を守るために共に力を合わせ、協力し合うということを正式に約束する 時です。被爆者に敬意を表すことがいかに適切なことであるかを強調することは重要なこと です。そのことは、私たちが困難に打ち勝つうえで先人のありがたさや平和を促進するため に戦うことの責任をよく考えさせ、思い起こさせてくれるからです。この恐ろしい出来事が 二度と繰り返されませんように。これが私からのメッセージです。

長崎の友人の皆様へ心からのご挨拶と恒久平和の願いを込めて。

(この日本語文書は参考のための仮翻訳で、正文は英文です)

令和2年8月9日 サントス市長 パウロ・アレッシャンドレ・バルボーザ

Message for the 75th Nagasaki Peace Ceremony

Cordial greetings to the sister city Nagasaki, honoring the celebration of the 75th anniversary of the atomic attacks. We would leave Brazil, towards Japan, to consolidate our support for the fight for nuclear disarmament and for world peace, but we were intimidated by the global and challenging pandemic outlook.

It is the moment to ratify the need for cooperation for joining efforts to preserve human lives. It is important to emphasize how appropriate the tribute to the hibakushas is, which reminds us and reflects on the importance of our ancestors in our current conquests and the responsibility to fight for the promotion of peace. May the experience of terror never be repeated. This is the message that I ratify.

To Nagasaki's friends, our greetings and the wish for lasting peace.

Paulo Alexandre Barbosa Mayor of Santos August 9, 2020

(姉妹都市)ポルトガル ポルト市長からのメッセージ (Sister City) Message from the Mayor of Porto, Portugal

被爆75周年長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典に向けて

8月9日は追悼の日です。

私たち皆は、長崎の街を破壊し多くの尊い命を奪った75年前の惨事を覚えています。私は、 姉妹都市ポルト市の市長として、犠牲になられた全ての方々、そして被爆者のご家族と被爆 者の皆様に敬意を表するため、この機会に貴市を訪問するつもりでおりました。

しかし残念なことに、私たちは今、別の種類の災いに見舞われているため、訪問すること ができなくなりました。

ポルト市民を代表し、皆様のご多幸をお祈り申し上げるとともに、この出来事を私たちが 覚えているということ、そして、75年が経過した今、世界と人類を恒久的に脅かし続けてい る核兵器から解放された世界がいつの日か到来することを願っているということを表明いた します。

(この日本語文書は参考のための仮翻訳で、正文は英文です)

令和2年8月9日 ポルト市長 ルイ・モレイラ

Message for the 75th Nagasaki Peace Ceremony

The 9^{th} of August is a day of remembrance.

We all remember the tragedy that occurred 75 years ago which destroyed the city of Nagasaki with a terrible cost of many lives. It was my intention as Mayor of the twinned city of Porto to visit your city on this occasion to honor all the deceased and also the family of the victims and the survivors.

Unfortunately, we are faced with a different tragedy which is making impossible for me to travel.

On behalf of the citizens of Porto, I would like to extend to you our best wishes, our memories of what happened and also the hope, that finally, after 75 years, the world will one day get rid of the nuclear weapons which are still a permanent threat to the world and humanity.



QRコードでメッセージ動画を見ることができます

Use the QR code to view messages

Rui Moreira Mayor of Porto August 9, 2020

(姉妹都市) フランス ヴォスロール村長からのメッセージ (Sister City) Message from the Mayor of Vaux-sur-Aure, France

被爆75周年長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典に向けて

ノルマンディー地方に降り注ぐまばゆい太陽の光のもと、ヴォスロール村の住民はこの平 和祈念式典に際し、皆様に対して深い友情を表明いたします。

75年前もそうであったように、今日の世界は難しい状況にあります。しかしながら、ド・ ロ神父が教えたとおりに、今の私たちは互いに支え、協力しあい、豊かな親切を示しあい、 機知に富み、希望を持つということをしており、素晴らしい時を共有しています。

世界が落ち着きを取り戻すこと、そして、近いうちに再びお会いできることを願っていま す。

(この日本語文書は参考のための仮翻訳で、正文は英文です)

令和2年8月9日 ヴォスロール村長 ブノワ・デムラン

Message for the $75^{\rm th}$ Nagasaki Peace Ceremony

Under the radiant sun of Normandy, the inhabitants of Vaux-sur-Aure wish to express their deep friendship on the occasion of this commemoration for Peace.

Like it was 75 years ago, the world is today going through difficult times. However, in line with the values conveyed by Father de Rotz, we also are currently sharing magnificent moments of mutual aid, cooperation, deep humanity, resourcefulness and hope.

We hope that serenity will return to the world and that we will soon be able to meet again.

Benoit Demoulins Mayor of Vaux-sur-Aure August 9, 2020



QR コードでメッセージ動画を見ることができます

Use the QR code to view messages

(姉妹都市)オランダ ライデン市長からのメッセージ (Sister City) Message from the Mayor of Leiden, the Netherlands

被爆75周年長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典に向けて

全ての姉妹都市に対して被爆75周年長崎平和祈念式典に向けたメッセージの提供を呼び かけられたことは素晴らしいアイデアだと思います。そうすることにより、式典に参加する ことができますし、私たちも皆さんと同じようにどんなにか平和を大切に思っているかをお 伝えできるからです。戦争と友情は相容れないものですが、戦争に対しては都市間の世界的 な友情が、特効薬となります。この数年間にわたり長崎市とライデン市の姉妹都市関係は、 互いの考えを理解していること、そして相互の目標と絆で深く結ばれていることを示してき ました。平和が大変重要な役割を果たす国連の世界的な目標を私たちは心から支持していま す。平和がなければ発展はなく、ただ破壊があるだけです。長崎はその大変な辛さを味わい ました。両国ともに75年にわたり平和な歳月を過ごしてきましたが、決してこれを当たり 前のものとみなしてはいけません。むしろ、式典の度にこのことを何度も何度もよく考える 必要があります。ライデン市民は皆様の気持ちに寄り添っています。素晴らしい式典となる ことをお祈り申し上げます。そして、ライデン市は長崎と共に世界の平和を祈ります。 (この日本語文書は参考のための仮翻訳で、正文は英文です)

> 令和2年8月9日 ライデン市長 アンリ・レンフェリンク

Message for the 75th Nagasaki Peace Ceremony

What a wonderful idea to invite all the sister cities to provide Nagasaki with a message on the occasion of this 75th peace ceremony. In this way we can still participate and let you know how much we share views on the importance of peace. War is the opposite of friendship and worldwide friendship between cities is a remedy against war. The sister city connection between Nagasaki and Leiden showed in the past years that we relate and are deeply connected to each other and these mutual goals. We wholeheartedly committed ourselves to the global goals of the United Nations in which peace plays such an important part. Without peace there is no development, only destruction, as Nagasaki has experienced so profoundly. And while our countries have experienced peace for 75 years, it is vital never to take this for granted and reflect about this again and again in commemoration. Our thoughts in Leiden are with you: we wish you a beautiful commemoration and above all: $\overline{\mathcal{I}}/\overline{\mathcal{I}}$



QRコードでメッセージ動画を見ることができます

Use the QR code to view messages

Henri Lenferink Mayor of Leiden August 9, 2020

(市民友好都市) 英国スコットランド アバディーン市長からのメッセージ (Citizens' Friendship City) Message from the Lord Provost of Aberdeen, Scotland, U.K.

被爆75周年長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典に向けて

アバディーン市は長崎市との結びつきを心から誇りに思っています。私たちの交流が始 まったのは、160年以上も前のことです。この両市のつながりが、日本の近代化において、 長崎が道しるべとなることにささやかながらも貢献していたとすれば嬉しいことです。

歴史の本に出てくる長崎についての記述には、日本の近代化において果たしたその役割に ついてだけでなく、75年前の1945年8月に原子爆弾によって大変な惨禍を経験した都市で あることも書かれています。この長崎が経験した大きな悲しみを世界の国々と共に、もちろ ん私たちも抱いています。長崎を訪問した際に、原爆資料館などで受けた強い衝撃を私は決 して忘れることはないでしょう。

私たち両市の全市民は、二度とこの出来事が繰り返されないように、との決意を強めなければなりません。

本日はこのような歴史的な機会に加わるようご招待賜りましたことに感謝申し上げます。 (この日本語文書は参考のための仮翻訳で、正文は英文です)

> 令和2年8月9日 アバディーン市長 バーニー・クロケット

Message for the 75th Nagasaki Peace Ceremony

The City of Aberdeen is very proud of its relationship with Nagasaki, a relationship which dates back 160 years and more. This relationship, I hope, was of some small assistance in making Nagasaki the beacon for progress in Japan.

Of Course, we also share with all the world the great sadness that Nagasaki features in the history books, not just for its role in the modernisation of Japan but also for the limitless tragedy of the nuclear bombing experienced in August 1945, 75 years ago. I personally, will never forget the impact made on me by my visit to the City and to its commemorations.

It must strengthen the determination of all of us in both our cities to ensure this event never happens again.

Thank you for the invitation to take part in your historic occasion today.

Barney Crockett Lord Provost of Aberdeen August 9, 2020



QR コードでメッセージ動画を見ることができます

Use the QR code to view messages

(市民友好都市) ドイツ ヴュルツブルク市長からのメッセージ (Citizens' Friendship City) Message from the Mayor of Wuerzburg, Germany

被爆75周年長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典に向けて

親愛なる田上市長、親愛なる長崎市民の皆様、ヴュルツブルク市の全市民を代表し、1945年 8月9日にご家族を亡くし、深い悲しみを経験されたご遺族の皆様に哀悼を表しますととも に、今なお(後障害に)苦しみ続けている被爆者の皆様に対して、衷心よりお見舞い申し上 げます。本日被爆75周年長崎平和祈念式典の挙行に際し、私たちの思いは皆様と共にあります。 今日のこの日を戦争がもたらす惨禍と破壊を決して忘れず、全ての核兵器を廃絶するため に闘い続けることを私たち全員が思い起こす日にしましょう。国境を越えた信頼関係と友情 を築くことなしに確固とした平和を築くことはできないと固く信じています。そのため、私 たちは両市の関係を尊重し、長崎市が本市の市民友好都市であることを誇りに思っています。

ような困難な時代にありますので、長崎市民の皆様のご健勝とご安全を心から祈念申し上げます。

(この日本語文書は参考のための仮翻訳で、正文は英文です)

令和2年8月9日 ヴュルツブルク市長 クリスチャン・シューハルト

Message for the 75th Nagasaki Peace Ceremony

Dear Mayor Taue, dear citizens of Nagasaki, in the name of all the citizens of Wuerzburg, let me express my deepest condolences to all the families that suffered an incredible loss on 9 August 1945 and to all the *hibakusha*, the survivors who are still suffering to this day. Our thoughts go out to you as you hold the 75th Nagasaki Peace Ceremony today.

Let this day be a reminder to us all to never forget the horrors and devastation of war and to keep fighting for the abolition of all nuclear weapons. We firmly believe that to ensure peace it is inevitable to build trust and friendship across borders. Therefore, we esteem our relations to you very highly and are proud to have Nagasaki as our friendship city. Let us continue on this wonderful path and let us keep speaking up for a better world together. In these troubled times, especially, allow me to convey the best wishes of health and safety to you all, the citizens of Nagasaki.

Christian Schuchardt Mayor of Wuerzburg August 9, 2020



QR コードでメッセージ動画を見ることができます

Use the QR code to view messages

ビクター・デルノア ~第1回祈念式典での平和メッセージとともに~

ビクター・デルノアとは

戦後、長崎の平和と再建のために尽力し市民から慕われたアメリカ人がいました。占領軍長崎軍政 部司令官を務めたビクター・デルノア氏です。占領軍のリーダーでありながら彼は被爆地長崎に来 て原爆に反対する考えを持ちました。

昭和23年(1948)8月9日の文化祭は、爆心地において長崎市主催で開催された第1回の平和祈念 式典にあたります。デルノア氏は「戦争は人類を破滅に導く無用の長物である。二度とこのようなで きごとが起こってはならない」とのメッセージを式典に寄せました。

デルノア氏の御息女パトリシア・マギー様からのメッセージ

1 August 2020

Dear Mayor Taue,

As the 75th anniversary of the atomic bombing of Nagasaki approaches, my thoughts turn to that tragic August day when tens of thousands of Nagasaki citizens perished, as well as to the following months and years in which many thousands more died. Today this cruel legacy continues in the suffering of the hibakusha, many of whom have dedicated their lives to trying to ensure that the terrible fate they have suffered will not ever again be repeated.

When my father, Lt. Colonel Victor Delnore, assumed command of the Occupation Forces in Nagasaki Prefecture in 1946, he dedicated himself to restoring peace and stability to that war-torn land. He told me that this was the most difficult challenge of his entire 35-year military career. At the same time, he said that the three years he spent in Nagasaki were the most rewarding of his life. This was due in large part to the dedication, courage, and cooperative spirit of the Japanese people. My father treasured those years and possessed great hope and confidence that the citizens would succeed in rebuilding a Nagasaki that the world would come to admire as a city of beauty and peace. If he were alive now, Delnore-san would be gratified to see that his hopes for Nagasaki have been realized.

Today, when many nations possess nuclear arms much more lethal than the plutonium bomb that devastated Nagasaki, the efforts to ban nuclear weapons are more crucial than ever before. The current volatile political climate, together with the devastating covid-19 pandemic, has further intensified tensions throughout the world. In the midst of these turbulent times, world peace may seem like an unreachable goal. But if the obstacles to world peace seem insurmountable, the answer is not to give up, but to work even harder. Mayor Taue, on behalf of my father I thank you for your tireless efforts as a leader in Mayors for Peace working toward a Treaty on the Prohibition of Nuclear Weapons. Your vision of a peaceful world is truly my father's vision also.

On August 9, 1948, to commemorate the third anniversary of the atomic bombing of Nagasaki, Lt. Col. Delnore authorized the first memorial ceremony. On that historic occasion, he addressed the citizens of Nagasaki in words that bear repeating: "Let the living of Nagasaki promise the deceased that they shall not have died in vain as long as their memory can be brought before the eyes of civilized men. All of us throughout the world should pray that such an event shall never occur again."

Mayor Taue, I know that you share my father's prayer. As a proud honorary citizen of Nagasaki, I join you and him, together with all peace-loving people throughout the world, in this prayer for world peace.

Sincerely, Patricia Delnore Magee 2020年8月1日

長崎市長 田上富久様

被爆75周年が近づく中、何万人もの長崎市民が亡くなり、その後も 更に何千もの方々が亡くなられた、8月のあの悲劇の日に思いを馳 せています。今なおこの残酷な遺産によって被爆者は苦しみ続けて います。被爆者の多くは、自分たちが苦しんだ恐ろしい運命が二度 と繰り返されないようにするため人生を捧げてこられました。

私の父、ビクター・デルノア中佐が1946年に占領軍長崎軍政部司令 官に就任した時、戦争で荒廃したまちに平和と安定を取り戻すこと に全力を傾けました。父は私に、軍人として過ごした35年間のキャ リアの中で、一番困難な課題であったと話しました。しかし同時 に、長崎で過ごした3年間は、人生の中で一番実りある時間であっ たとも言っていました。これは、日本の人々の献身、勇気、そして 協力的精神に大きく因るものであります。父は長崎で過ごした時間 を大切にし、長崎が美しく、平和なまちとして世界から称賛される 都市に復興することを大いに期待していたことが実現されたこと を嬉しく思ったに違いありません。

長崎を壊滅させたプルトニウム型原子爆弾よりもはるかに威力のあ る核兵器を多くの国々が保有する今日、核兵器を禁止する取組みの 重要性は更に増しています。不安定な政治情勢に加え、壊滅的な影 響を及ぼしている新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の世界 的流行によって、世界中が更に緊迫した情勢となっています。この ような不穏な時代において、世界平和は到達不可能な目標に思えま す。しかし、世界平和への障害を乗り越えることができないように 思える時には、諦めることなく、更に努力をしていくことがその答 えです。田上市長、父に代わりまして核兵器禁止条約に向けて取組 んでいる平和首長会議のリーダーとしてご尽力いただき感謝申し上 げます。貴台の平和な世界へのビジョンは、まさに私の父のものと 同じであります。

1948年8月9日、長崎の被爆3周年を記念した第1回目の平和祈念 式典の開催をデルノア中佐は許可しました。この歴史的な式典にお いて、デルノア中佐は繰り返して言う価値のある次の言葉を述べま した。「長崎の皆さん、原爆で亡くなられた方々に誓いましょう。 文明人たちの間で原爆犠牲者の記憶が想起される限り、犠牲が単な る犠牲に終わらないことを。世界中の人々はこのような出来事が二 度と起こらないことを祈るべきであります。」

田上市長、あなたが父のこの願いを共有されているのを存じていま す。誇りある長崎栄誉市民として、貴台、父、そして世界中の平和 を愛する人々とともに、世界平和へのこの願いを祈念申し上げます。

謹白

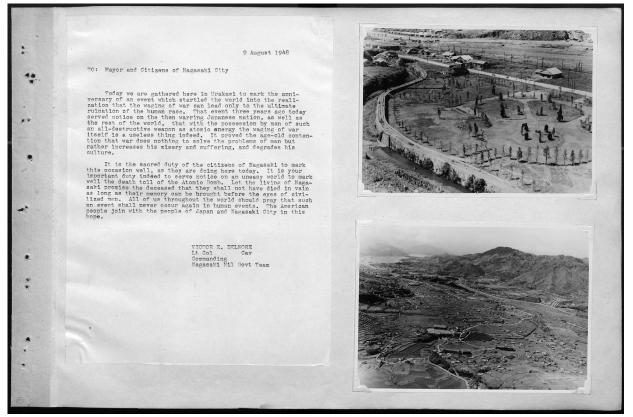
パトリシア・デルノア・マギー

第1回文化祭(現在の平和祈念式典)にデルノア氏が寄せたメッセージ

式典ではデルノア氏のほか、連合国軍最高司令官マッカーサー元帥のメッセージの伝達、市民を代 表して溝上太郎市議会副議長による平和宣言も行われました。

デルノア氏のメッセージには戦争を否定する内容が含まれており、占領軍の人間としては異例のものでした。

右上の写真では、この頃までに爆心地の公園化が完了しているのがわかります。



メリーランド大学ゴードン W. プランゲ文庫所蔵

(デルノア氏メッセージの和訳)(※昭和23年(1948年)8月10日付「長崎民友新聞」原文ママ) 平和宣言 長崎市長ならびに市民各位 わが長崎の地は、世界における原 本日私共がここ浦上に参集したるは終局において戦争は人類を破滅 爆の基点として世界戦争に終止符を へ導くものであることを如実に悟らしめ、全世界の人々を驚駭(注: 打った土地であって、この原爆の未 非常に驚くこと)せしめた原爆の記念日を顕揚せんがためである。 曾有の惨禍を一転機として平和な明 年前の今日の出来事は他の国民のみならず日本の国民にも人類が無限 るい希望がもたらされた の破壊力を持つ原子力を獲得した事で戦争が真に無益なものなること その意味から長崎は世界的な地位 を知らしめた。人類の問題を解決するに戦争が無益などころか寧ろ悲 において最も印象の深い土地であり、 惨と苦難を増大し文化を廃退せしめるものなることを立証した。 アトム長崎を再び繰り返すなと絶叫 諸君が今此処でやられて居る通りこの機会を顕揚されることは各位 することによって、恒久的平和は確 立するものと信じて疑わぬ。 の神聖な義務である。不安な世界に警告を与えるは犠牲者達の死を記 念するためにも大切なる事柄である。市民各位一各位は文化人として 犠牲を単なる犠牲に終らしめないことを誓って貰いたい。その記憶が 我々は、この文化祭の式典に当っ ノーモア・ナガサキを力強く標 蘇えらせられる限り、世界の人々はかかる出来事が人間の世界に又と ぼうし、広く世界に宣明せんことを 再び起らないよう祈願せねばならない。アメリカ国民はこの点におい 期し、ここに宣言す。 て各位と協力を惜しむものではない。 昭和23年8月9日 1948年8月9日 市民代表 長崎軍政府司令官 米国陸軍中佐 ヴィクトル・イ・デルノアー

●平和祈念式典会場周辺図

